

受験 番号					
氏名					

二〇二三年度 二月二日 入学試験 国語問題

国語の注意 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

答えは解答らんからはみ出さないように書きなさい。

字数の指定がある場合は、句読点や記号なども一字に数えなさい。

【試験についての注意事項】

- 1 机の上に出してよいものは、次の三つです。それ以外のものはカバンにしまってください。
    - ① QRコードシール と 受験票（机の左上におきます）
    - ② えんぴつ数本（シャープペンシルも可・色ペンやマーカー、定規の使用は不可）
    - ③ 消しゴム
  - 2 次のものを持ってきた場合は、カバンにしまってください。また、休けい時間中も使用してはいけません。
    - ① 腕時計・置き時計など（音が鳴らないようにしてください）
    - ② 携帯電話・スマートフォン（電源を切ってください）
    - ③ 腕時計型の情報端末（Apple Watch など）
- ※ 許可なく携帯電話・スマートフォンや腕時計型の情報端末を使用した場合、不正行為とみなすことがあります。
- 3 机の中には、何も入れないでください。
  - 4 チャイムが鳴ったら、次のことを完了してから始めてください。

問題用紙 ↓ 受験番号 と 氏名 を記入してください。

解答用紙 ↓ 受験番号 と 氏名 を記入し、QRコードシール を貼ってください。
  - 5 問題についての質問は、いつさいできません。
  - 6 気分が悪くなったら、すぐに申し出てください。
  - 7 物を落としたら、自分でひろわず、手をあげてください。

次の【文章A】は、瀬戸内寂聴（せとうちやくちやう）が二〇一八年に書いた、自伝的小説『あこがれ』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

設問の都合により本文には一部省略や改変があります。また、文中の難しいことばには※( )の形で注を付け、方言には( )で意味を記してあります。

### 【文章A】

(本文省略) ※著作権法上の手続完了まで省略します。

問一 〓線①～④のかたかなをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 〓線(1)「小ぢんまりした胴体に似合わない大きなさげび声」、〓線(2)「異様な船のだみ声」とは何のことですか、2ページの下の段の本文中から漢字二字でぬき出しなさい。

問三 〓線(a)～(e)についての説明として適切なものには○を、そうでないものには×をそれぞれ答えなさい。

(a) 「膝を抱いて、何時間でも坐りこんで飽きなかった」……ここには、独りでいたがさびしい気持ちだけではなかったことが表れている。

(b) 『旅』という言葉を感じたわたしは、姉や母にうるさがるさがるほどつきまとい、旅について訊きたがった」……ここからは、父の旅に関心があったというより「旅」というものそのものに心惹かれてしかたなかったことがわかる。

(c) 「母の袂をしっかりと握りしめ」……ここからは、緊張感や不安感と同時にわくわくする気持ちの高まりも読み取ることができる。

(d) 「男の肩の上で体を弾ませていた」……この動作は、本当は不安でいっぱいだが勇気を出して楽しもうと自分を励ましていることの表れである。

(e) 「わたしは男の肩の上からだを強くゆすった」……この動作は、自分の気持ちで自分でもよくわからずじれったい思いを表している。

問四 〓線(3)「わたしは母さんの掌に思わず爪を立てていた」とありますが、この時の「わたし」の心情を答えなさい。

問五 本文の書き方の特徴についての説明としてあてはまらないものを次の中から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 今から約九十年前の徳島が舞台となっており、当時のことを知らなければ具体的にイメージできない部分もあるが、ハアちゃんの心の動きは時代を越えて理解できる描き方になっている。

イ 連絡船の様子を象や牛、お姫さまにたとえたり、町の灯の様子を蛍の光にたとえたりする比喩は、作者の主観を表すのではなく、当時のこの町の人々が皆そのようなたらえ方をしていたことを表している。

ウ 姉との会話の場面や連絡船で肩車されている場面などでは、作者が四歳のころの自分にもどって、当時の気持ちになつて書いているような生き生きとした描写になっている。

エ はしかをこじらせた事情や母の病気のことなどの説明では、作者が大人になつてから理解した内容が書かれており、ひとり遊びをするようになった理由がよくわかる。

オ ひとり遊びの場面にある「なんとなく心がほっこりやわらかく」「なぜか好ましくて」といった表現からは、作者が当時の「わたし」に対して疑問や否定したい感情を持っていることが伝わってくる。

問六 次の【文章B】は、【文章A】と同じ瀬戸内寂聴『あこがれ』の一節で、【文章A】中の〓線X「もう眠っている姉はそのままにして」より後の見送りの場面で「わたし」が体験した内容と共通点があります。これを読んで、後の1～3の問いに答えなさい。

### 【文章B】

(本文省略) ※著作権法上の手続完了まで省略します。

1 次のア～オについて、【文章B】の説明としてあてはまるものには○を、そうでないものには×をそれぞれ答えなさい。

ア この場面は【文章A】でも触れられていた「ひとり遊び」の一つである。

イ わかつてみれば硝子工場の当たり前の作業の様子だが当時の「わたし」には魔法のように思えたことを、現在の作者は愛おしんでいる。

ウ 好奇心いっばいの「わたし」は工場の大人たちから一目置かれ、居場所を与えられるようになった。

エ 「わたし」は自分の宝物の数々が実は取るに足らないものばかりだと思っようになつた。

オ 「わたし」はこれまで、見聞きしたことを不思議に思つても特に気にも留めずにやり過してきた。

2 線(4)「ああ、知らないことばかり……」とありますが、「わたし」は知らないことが増えて抱えきれないほどになることをどのよう思っていますか。答えなさい。

3 【文章A】の最後の【Y】には、どのようなことが入ると考えられますか。

【文章B】の内容をふまえて答えなさい。

次の文章は、二〇二二年四月に発表された若松英輔『言葉のちから——十歳の君へ、八通の手紙』の第二通目の手紙「ただ一つの人生」の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

設問の都合により、本文には一部省略や改変があります。また、本文を四つに分けてⅠ～Ⅳという段落番号を付けてあります。

(本文省略) ※著作権法上の手続完了まで省略します。

問一 線①～④のかたかなをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 線(1)「戦争が始まったんだ」とありますが、筆者は戦争が起こる理由を本文の最後まで、追求しています。どうして戦争が起こってしまったのか、筆者の考えを答えなさい。

問三 段落Ⅰでの筆者の考えにあてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ウクライナの人々が自分の苦しみを世界に知らせる努力を十分にしないために、世界中の人々は救いの手を差し伸べられず、行きづまっている。

イ 人に心を開いて素直に心の内を打ち明けられることができず、苦しみや悲しみを一人で抱え込んでしまうことが多いのが、今の時代の悪いところだ。

ウ 表現されない苦しみは知ることができないのだから、知らない所で苦しんでいる人が必ずいると思つて、未知のその人たちの無事を祈ればよい。

エ 人々の苦しみや悲しみを伝える大切な情報を見逃すことのないように、もつとテレビやインターネットをチェックする努力をあきらめたくない。

問四 線(2)「そうした浅い理解が当たり前の世のなか」の説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 情報技術の発達により世界中の出来事がわかるようになったことに基づく。

イ 自分が知り理解できることに偏りがあることになかなか気づかない。

ウ 刻々と変化する大量の情報への対応に追われて生きる人が少なくなっている。

エ 目に見えずことばにならないものこそが大切なものだと思われている。

問五

——線(3)「思わぬときに糸口が見つかる」とありますが、段落Ⅱの筆者の考えに  
あてはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人は悩みや苦しみから早く逃れようとして、解決の糸口を自分の内部にて  
はなく自分の外部に求め、余計に苦しくなる。

イ 宇宙の営みを季節ごとに変化させる力の存在を感じることができるのは、  
人間の「魂」にも同じ力が流れ込んでいるからである。

ウ 行きづまったとき、自分が変われないと思っっている限り解決の糸口はつか  
めないが、自分の中の生命の力に気づけると転機が訪れる。

エ 人間の日常生活の場合、今日と昨日に変化はないが一週間単位では変化が  
生じるため、時を待てば問題は無理なく自然に解決するものである。

問六 ———線(4)『つながって』いる」とありますが、「つながる」と反対の意味でつか  
われていることばが本文中にいくつありますか。その一つを答えなさい。

問七 段落Ⅲ・Ⅳでの筆者の考えをまとめた次の文章中の 1 1 7 に  
入る適切なことばを、後のア～キの中から選びそれぞれ記号で答えなさい。(同じ  
ことばは二度使えません)

私たちが 1 「で世界を感じていると思っっている「自分」より、もっと  
深い場所にある「もう一人の自分」が、筆者の言う 2 「にあたると思わ  
れる。

でも私たちは、その存在にふだんは気が付いていない。気が付くためには、「光」  
が射しこむことが必要だが、この「光」とはどのようなものかというところ、ふだん気が  
付いていない「もう一人の自分」を見つけて出そうとする 3 「こそが「光」  
となると筆者は考えている。

「もう一人の自分」を見つけて出すことで、本当の意味で「自分自身である」ことが  
どのようなことなのか、わかるようになる。その結果、自分は自分にしかない色を  
ともなう「魂」を持った、「唯一の存在」であるというところに気が付く。

そのようにして「自分」は「もう一人の自分」とつながり、自分の中の無限

の 4 「に気が付くのである。そのことにより「自分」は「もう一人の自分」  
に支えられ、また力づけられるようになる。だから、「もう一人の自分」を見つけ  
出そうとする「光」は私たちにとって 5 「の光」と言えるのである。

さらに、「自分」が「もう一人の自分」とつながると、その時初めて、自分以外  
の人にもそれぞれ、自分と同じように深い場所に 6 「があるというこ  
とに気が付くことができる。

つまり、自分以外の人もそれぞれ、自分と同じ「魂」を持った 7 「  
であるということに気が付くのである。自分だけが特別なのではなく、みんなが特  
別の存在なのである。

「魂」で世界と他者とつながる、という筆者の言葉は、このような思考の結果導き  
出されたものなのであろう。

- ア 心
- イ 魂
- ウ 希望
- エ もう一人の自分
- オ 唯一の存在
- カ 行い
- キ 可能性

問題は「ここ」で終わりです。

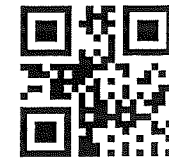
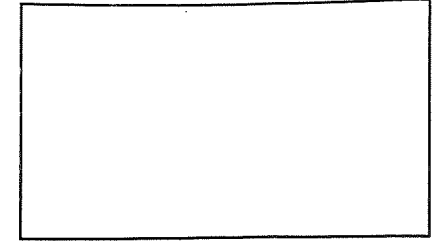
問四	問三	問二	④	①	問一
			ち		
				②	
				かれて	
				③	
				ねよう	

5	1	問七	問六	問五
6	2			
7	3			
	4			

問四	問三	問二	④	①	問一
				って	
				②	
				③	

3	2	1	問六	問五
		ア		
		イ		
		ウ		
		エ		
		オ		

↓枠の中にシールを貼ってください↓



232210

二〇二三年度  
国語解答用紙

受験番号			

氏名	